

早期虐待予防を目的とした子育て支援プログラムについて —親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた!”の実施からわかる参加者への効果—

寶川 雅子 (初等教育学科)

Child Care Support Program for Early Child Abuse Prevention: Effects of the “We have a baby!” Program

Masako Houkawa

Department of Primary Education, Kamakura Women's University Junior College

Abstract

A program that aims to bond new mothers and newborns called “We have a baby!” (BP program) was developed on the basis of the principles of “Nobody's Perfect” and takes the child care situation in Japan into account.

Here, we overview the BP program and examined its effects by actually executing the program. BP program participants showed a positive attitude toward parenting. This is because they were able to meet fellow parents, reduce the sense that childcare is isolating, increase confidence in childcare, and involve themselves with the baby in order to relax.

Key words: abuse prevention, child care support, BP program

キーワード：早期虐待予防、子育て支援プログラム、親子の絆づくりプログラム “赤ちゃんがきた!” (BPプログラム)、

はじめに

1980年代、赤ちゃんとのふれあい経験のない大人が出産をする確率は、30%程度であった¹⁾。ところが、現在はおよそ74%²⁾の大人が、わが子を産んで初めて赤ちゃんに触れあっているという時代になってきた。そして、虐待による0歳児の死亡人数は、全体のおよそ4割を占めている(厚生労働省報告 2011年度)。現在の子育て世代は、既に日本が、少子化と叫ばれていた時代に育った世代である。一人っ子で、近所や親戚に小さな子どもが居なく、祖父母とも離れてマンションで暮

らす核家族等の生活環境の中で育ち、必然と子どもとの触れ合い経験が乏しくなる。

親となった者はみな、わが子を大切に育てようと一生懸命子育てに取り組む。ところが、これまでの経験が乏しいがために、子育てへの不安、イライラ、負担感を募らせやすい。また、核家族化が珍しくない現在では、ちょうとした子育てについて相談をする仲間もできず、ますます子育てに不安、負担感を募らせやすい。周知のとおり、育児の孤立化や子育ての不安は、子どもの虐待を引き起こす要因にもなるのである。厚生労働省では、

「児童虐待対策の現状と今後の方向性」³⁾を打ち出し、虐待の発生予防から必要な施策を講じている。その代表的なものの一つに乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）や地域子育て支援拠点事業などが挙げられる。ところが、「子ども・子育てビジョンに係る点検・評価のための指標調査」⁴⁾の報告書によると、「児童虐待を防止するとともに、社会的養護を充実する取組」は、国として取り組んでいない（取り組みを行っていないと思う国の取り組み）と認識していることがわかった。虐待防止対策にはまだまだ力を注ぐ必要があるのである。

現在の子育てその他の環境・実情を考えると、0歳児期の子どもを持つ親、すなわち産後早期からの支援が子ども虐待を防ぐ大きな“カギ”となっているように思われる。

「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”（BPプログラム）」は、Nobody's Perfectプログラムの理念^{5),6)}を基に、日本の子育ての状況に合わせて考案されたプログラムである。

本稿は大きな2つの目的を持っている。1つ目は、BPの概要を紹介し、BPを周知すること。2つ目は、BPを実際実施し、参加者に対する実施の効果を検討することである。

BPを活用したより効果の高い早期虐待予防への取り組みを目指すことが本稿の大きな目的である。

1. 親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”

（愛称＝BPプログラム）について

1-1. BPプログラムとは

親と子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”（BPプログラム）は、NPO法人こころの子育てインターネット関西（KKI）によって開発され、2011年2月より実施されているプログラムである。初めて赤ちゃんを育てている母親と0歳児の赤ちゃんと一緒に参加できるプログラムである。BPプログラムでは、“親は一生懸命育児をしているが、経験不足や孤立化などが弱点となり、育児をうまく行うことが困難になっている。”これら弱点を補うためにBPプログラムを活用するといった視

点に立っている。Nobody's Perfect（NP）の理念を基にし、日本の子育ての現状を踏まえてプログラムは構成。受講形式で知識を学ぶだけではなく、参加をしたお母さん同士が話し合う中で、育児の知識やスキル、親の役割などを一緒に学び、深めていく。NPも0歳からを対象としているが、0歳児期の子どもを持つ母親と1歳以降の子どもを持つ母親の子育ての悩みの内容が異なる傾向にあることから、0歳児期の子どもを持つ母親のみを対象としたプログラムが開発されたのである。

1-2. BPプログラムの枠組み

1-2-1 対象

対象は、初めて赤ちゃんを育てている母親と0歳児期の赤ちゃんである。BPプログラムは、前期プログラムと後期プログラムの2つに分けられている。前期プログラムは、2か月～5か月の赤ちゃんとその母親が対象である。後期プログラムは、5か月～8か月の赤ちゃんとその母親が対象となっている。早期虐待予防や育児の不安軽減、産後鬱の軽減等、初めて母親となる者の精神的負担を軽減し、少しでも早く安心して子育てが行える生活を獲得するためには、産後早期に実施される前期プログラムへの参加が望ましいが、前期プログラムへの参加が叶わなかった場合は、後期プログラムへの参加が可能。プログラムへの参加は、前期または後期のどちらか一方である。プログラムは、母子同室で行い、プログラム中の授乳やおむつの交換など赤ちゃんへのお世話は自由に行える。

1-2-2 母親の状態

特に条件を設けておらず、参加条件に合えばどなたでも参加することができる。しかし、BPプログラムは、治療を目的としたプログラムではないため、専門家の個別対応が必要な深刻な問題を抱える家庭を対象にはしていない。

1-2-3 参加の方法

公募とアウトリーチによる。

子どもの対象年齢が低月齢であるため、低月齢児を持つ母親にBPプログラム開催の情報が届くような募集方法を工夫する必要がある。特に関係機関との連携は、事後フォロー等にも関わるため、

可能ならば連携を取ることが望ましい。

1-2-4 講座の手法

参加者同士の話し合いによってプログラムが進行される参加型である。

BPプログラムでは、トレーニングを受けた「BPJ認定BPファシリテーター」がプログラムを進行するが、ファシリテーターはあくまでも「黒子」に徹するよう訓練を受ける。同じ地域から参加をしている参加者同士は、BPプログラムが終了してからも、お互いに助け合える子育て仲間が発展していく大きな可能性をもっている。同じ地域に子育て仲間ができるということは、子育ての不安や負担感を軽減することにつながり、結果的に虐待を予防することとなる。このような可能性を潰さないためには、BPプログラム実施時から参加者同士の橋渡しができるファシリテーターの力量が求められるのである。ファシリテーター主導のプログラムの展開では、参加者が持ち備えている能力を奪うことにもなりかねない。

1-2-5 実施回数

連続週1回 計4回。

BPプログラムは全4回で1プログラムという仕組みになっている。4回のセッションは、1週間隔で行うことが望ましい。また、プログラム実施場所、開始時間についても、毎週同じ場所、同じ時間で行うことが望ましい。

1-2-6 時間

毎回2時間（プログラム化された時間1.5時間、後半30分は、質問交流タイム）。

各セッションは、2時間で構成。前半の1時間半は、プログラム化されている。参加者の中に、馴染みのない人とコミュニケーションをとることが苦手という人でも、参加をしやすい。後半の30分は、参加者同士の交流時間、質問時間である。わずかに30分であるが、参加者同士お互いを知り合ったり、情報交換を行う貴重な時間である。

1-2-7 参加人数

5～20組（最大20組）。参加者が10組を超える場合は、ファシリテーター2人で実施する必要がある。

1-2-8 進行役

基本的にはBPJ認定BPファシリテーター2人で実施する。参加者が11組～20組の場合は、必ずファシリテーター2人で実施し、参加者が5～10組の場合は、ファシリテーター1人と、アシスタント1人でも実施可能。

1-2-9 保育

母子同室のため保育も保育室も必要ない。

1-2-10 講座内容

初めて子育てを行う0歳児の子どもを持つ母親の心身の状況に考慮してつくられた、構造化された内容である。NPの理念を基本とし、BPプログラムの目的に沿って作成された計画で実施する。

1-2-11 得られる効果

(1) ピアレビューができる子育て仲間づくり>

BPプログラムでは、「安心・安全な場の提供」と「人と人をつなぐこと」によって安心して話したり、相談できる子育ての仲間づくりが可能である。参加型で連続講座であるため、グループとしての連帯感が生まれ、仲間づくりを促進することができる。

(2) 育児知識とスキルの学習（少し先を見越した子育ての基礎知識の学習）

0歳児を育てている親の場合、単に「そのことを知っているか、知らないか」によって子育てへの不安や子どもへの対応が異なる場合もある。例えば、赤ちゃんの生活リズムや食事、からだの発達、事故防止などである。BPプログラムでは、参加者同士が子育て体験を学びあうとともに、DVDや参加者用テキストなどの教材を活用し、子育ての基礎的な知識を学ぶ機会を提供していく。

(3) 「親子の絆」が深まり、子どもの心に「心の安定根」が育まれる

プログラム名にもなっているように、BPプログラムでは、「親子の絆」づくりを、重要な課題としている。そして、親子の絆づくりを通して子どもの心に「安定根」を育むことが大きな目的である。

子育て仲間ができたり、育児の知識を獲得することで、親が心身ともに安定して赤ちゃんにかかわれる状況が生まれる。普段の親子のかかわりを大切にするとかかわりが増え、相手（赤ちゃん）

のことをよくわかるようになり、ますます赤ちゃんがかわいと感じられるようになる。すると赤ちゃんは、「安心で、愛されて守られている」と感じ、ますます親子の絆が深まり、赤ちゃんの心に「心の安定根」が育まれる。「心の安定根」は、起き上がりこぼしのように、倒れても起き上がれる強靱な人格の素となるのである。「心の安定根」は、母親から贈られる一生の宝物なのである。

2. BPプログラム実施

ここでは、BPプログラムを実施し、参加者からのアンケートを通してBPプログラムの実施効果について検討を行う。

2-1. プログラムの実施

2014年1月～7月の間に異なる地域で2回実施。

2-2. 主催者

A市役所子育て支援担当課、NPO法人。

2-3. ファシリテーター

資格を持つ同一人物が、ファシリテーターを務めた。

2-4. 参加者

1回目：9人、2回目：7人、合計16人

2-5. プログラムの効果を検討するための方法

プログラム終了時および、プログラム終了後（およそ1～3か月後）に実施した2回のアンケート調査による。倫理的配慮として、鎌倉女子大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号：鎌倫一14003）。

2-6. アンケート実施方法

(1) 1回目アンケート

最終セッション終了時に、趣旨を説明したうえで実施。アンケートの質問項目については、BPプログラムセンターで規定された項目を利用。アンケートは任意であり、アンケートの趣旨に同意いただいた参加者のみアンケートを提出。最終セッションに欠席をした参加者に対してはアンケートを実施していない。

1回目アンケートの実施人数は9人。アンケート回答人数は9人。回答率100%

(2) 2回目アンケート

BPプログラム終了からおおよそ1～3か月後に郵送にて実施。アンケートの趣旨については、最終セッション時に文書を配布し文書に基づいて説明。更に、アンケート郵送時にも趣旨を説明した文書を同封した。返送をもって同意を得たこととした。

2回目アンケート郵送人数は9人。回答人数は6人。回答率67%。

2-7. 1回目アンケート結果

1回目アンケートは全12項目。アンケートの内容を表1に、アンケートの結果を表2にまとめた。

表1 BPプログラム1回目アンケート内容

1. このプログラムに参加をしたきっかけは何ですか？ 2. BPは、4回のプログラムですが、回数はどうでしたか？ 3. 1回は2時間（後半30分は自由交流・質問時間）ですが、時間はどうでしたか？ 4. このプログラムは参加者の安心・安全は守られていましたか？ 5. このプログラムに参加して、赤ちゃんのことや育児のことを話し合える友だちはできましたか？ 6. このプログラムに参加して、育児の方法について何か新しい知識は得られましたか？ 7. テキストは役にたちましたか？ 8. このプログラムは、あなたの育児に役立ちましたか？ 9. このプログラムに参加をしての満足度はどうですか？ 10. このプログラムをほかの母親にすすめたいと思いますか？ 11. このプログラムで、こころに残った内容は？（いくつでも可） 12. このプログラムに参加して、赤ちゃんに対する思いや接し方に変化はありましたか？自由に書いてください。

表2 BPプログラム1回目アンケート結果

アンケート項目								
1 参加したきっかけ	①市町村の広報・HP・チラシ	22.2%	②関係者からの紹介	22.20%	③知人の紹介	55.60%	④その他	0%
2 回数	①多い	0%	②ちょうどいい	77.8%	③少ない	22.2%		
3 時間	①長い	0%	②ちょうどいい	100%	③短い	0%		
4 安心・安全は守られていたか	①守られていた	88.90%	②まあまあ守られていた	11.10%	③あまり守られていない	0%	④守られていなかった	0%
5 友だちはできたか	①できた	44.40%	②少しできた	33.30%	③あまりできなかった	11.10%	④できなかった	11.10%
6 新しい知識は得られたか	①得られた	66.70%	②少し得られた	22.20%	③あまり得られなかった	11.10%	④全然得られなかった	0%
7 テキストは役にたったか	①とても役立った	11.10%	②少し役立った	77.80%	③まあまあ役立った	11.10%	④全然役立たなかった	0%
8 育児に役立ったか	①とても役立った	33.30%	②少しやくだった	66.70%	③まあまあ役立った	0%	④全然役立たなかった	0%
9 満足度	①とても満足	55.60%	②まあまあ満足	44.40%	③やや不満	0%	④不満足	0%
10 他の母にすすめたいか	①ぜひすすめたい	44.40%	②すすめてもいい	55.60%	③あまりすすめたくない	0%	④すすめたくない	0%
11 ころに残った内容(複数回答可)	①生活リズム	11.10%	②危険防止	0%	③泣くこと	11.10%	④心の発達と遊び	11.10%
	⑤心の安定根	66.70%	⑥ピエロバランス	66.70%	⑦親になること	56.60%	⑧その他	11.10%
12 赤ちゃんに対する思いや接し方の変化	・抱っこをたくさんしてあげようと思いました。自分の時間を持つことがなんだか悪いことのように思っていたけど、ピエロバランスの話して、なまの欲求も大切にしていんだと思えたので、良かったです。子育て70点目指して楽しみながら子育てしていこうとおもいます。 ・抱っこをたくさんしてあげるようになった ・参加をしたら赤ちゃんの接し方が変わったというわけではないけれど、同じようにストレスや不安、また喜びを抱えている人がいるとわかったことは、とても嬉しく安心した。友達になるとまではいかないけれど、もう少し、回数がないと無理かも…。なので、会える機会があれば会いたいです。 ・気が少し楽になり、ストレスが減りました。 ・自分自身の悩みが少し和らぎ、気持ちに多少の余裕が生れた気がします。 ・自分の赤ちゃんに近い人ばかりだったので、いろいろと参考になりました。							

1 回目を実施したアンケートの内容については、BPプログラムを開発したNPO法人ころの子育てインターねっと関西(KKI)によって、日本全国を対象とした大規模かつ具体的な分析を行っている(「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた!”(愛称:BP)参加者によるプログラム評価結果」2012年6月 NPO法人ころの子育てインターねっと関西を参照)。本調査でも、KKIが調査をした結果と概ね同様の結果を得ることが出来た。すなわち参加者は、「ピアレビューができる子育て仲間づくり」「育児知識とスキルの学習(少し先を見越した子育ての基礎知識の学習)」「親子の絆」が深まり、子どもの心に「心の安定根」が育まれる」といった、BPプログラ

ムに参加をすることで得られる効果を獲得し、プログラムへの参加に満足をして終了したという結果を得たのである。参加者の中には「BPに参加をするまでは、自分は子育てに向いていないと思うことがたびたびあったが、BPに参加をし、いろいろ話ができただけで、私にも子育てができそうと思えるようになった。」と率直な思いを寄せてくださる方もいらした。

やるべきことをやり通した直後は達成感もあり「良かった」と感じるものである。BPプログラムの場合も同様である。プログラムへ参加をしたことが、本当に参加者の子育てに反映されていることを確認するためには、プログラムを終了しつつもの生活に戻り、ある程度の時間が経過してか

らでないとは反映の有無はわからない。そこで、本調査では2回目アンケートを実施することにした。プログラムに参加をし、子育てへの変化の有無、変化があったとするならば子育てのどのようなどころに変化があったのかを2回目アンケートで調べることにしたのである。

2-8. 2回目アンケート結果

2-8-1 アンケート項目

2回目アンケート項目内容は、「親育ち支援プログラム」導入ガイド（平成26年3月発行 神奈川県県民局次世代育成部次世代育成課発行・編集）の、アンケート項目を参考に作成した。特に、厚生労働省が打ち出している「児童虐待対策の現状と今後の方向性」の発生予防の課題の中で、「育児の孤立化、育児不安の防止を」掲げていることから、特に「育児の孤立化」「育児不安」に関連する項目を参考に作成した。アンケートの内容は表3に記した。

表3 BPプログラム2回目アンケート内容

1. BPに参加をして、赤ちゃんのことや育児のことを話し合える人はできましたか？ 2. BPに参加をしたことで、子育ての負担感は変わりましたか？ 3. BPに参加をしてから、落ち込んだ気持ちは変わりましたか？ 4. BPに参加をしてから、子育ての孤立感は変わりましたか？ 5. BPに参加をしてから、赤ちゃんやゆったりとした気分で関われる時間は増えましたか？ 6. BPに参加をしてから、子育てをしている自分に「親としての自信」に変化はありましたか？ 7. BPに参加をしたことは、子育てに役立っていますか？ 8. BPに参加をしたことで、その後の子育てに変化があったのか、その他、BPに参加をしたことで、もし、何か変化がありましたらなんでもかまいませんので、以下に記入してください。

回目アンケートは、1回目アンケートよりも回答数が少なく参考程度の情報にとどまるが、今後のBP実施、子育て支援、虐待予防につながる貴重な意見を得ることが出来た。今後継続して実施する予定である。

表4をもとに、項目ごとに結果を検討していきたい。

- 1、赤ちゃんのことや育児のことを話し合える人：「できた」「少しできた」あわせて100%。
- 2、子育ての負担感の変化：「軽くなった」「少し軽くなった」あわせて100%。
- 3、落ち込んだ気持ちの変化：「減った」「少し減った」あわせて83.3%。「変わらない」16.7%。「変わらない」と回答された方は1名だが、「今までも落ち込んだ気持ちはなかったから変化はない」とコメントしている。
- 4、子育ての孤立感：「とても軽減された」「少しは軽減された」あわせて83.3%。「変わらない」16.7%。「変わらない」の回答は1名。「変わらない」を選択した理由について「孤立感を感じたことがないから」とコメントしている。
- 5、赤ちゃんやゆったりとした気分で関われる時間：「増えた」「少し増えた」あわせて100%。
- 6、親としての自信：「自信が持てた」「少し自信が持てた」あわせて83.3%。「変わらない」16.7%。「変わらない」と回答された方の他の項目の回答からは、子育てへの気持ちは良い方向に変化をしていることが窺える。
- 7、BPへの参加が子育てに役立っているか：「とても役に立っている」「役に立っている」あわせて100%。

これらの結果から、BPプログラムへの参加は、ある一定の時間が経過しても良い効果として継続していることがわかる。さらに、BPで知り合った仲間とその後継続して会う機会を設けており、地域の中で子育て仲間をつくり、子育ての孤立化を防ぐことにもなっている。このような結果から、BPは早期虐待予防に効果があると考えられる。

2-8-2 結果

2回目のアンケート結果を表4にまとめた。2

表4 BPプログラム2回目アンケート結果

アンケート項目										
1 話し合える人	①できた	66.7%	②すこしできた	33.3%	③あまりできなかった	0%	④できなかった	0%		
2 負担感	①軽くなった	16.7%	②少し軽くなった	83.3%	③変わらない	0%	④少し負担が増えた	0%	⑤負担が強くなった	0%
3 落ち込んだ気持ち	①減った	33.3%	②少し減った	50%	③変わらない	16.7%	④少し増えた	0%	⑤増えた	0%
4 子育ての孤立感	①とても軽減された	50%	②少しは軽減された	33.3%	③変わらない	16.7%	④孤立感が少し増した	0%	⑤孤立感が増した	0%
5 赤ちゃんやゆっくりとした気持ちでかわる	①時間が増えた	33.3%	②少しは増えた	66.7%	③変わらない	0%	④時間が少し減った	0%	⑤時間が減った	0%
6 親としての自信	①自信がもてた	16.7%	②少し自信が持てた	66.7%	③変わらない	16.7%	④少し自信を失った	0%	⑤自信を失った	0%
7 BPが役立っているか	①とても役に立っている	33.3%	②役に立っている	66.7%	③変化はない	0%	④あまり役だっていない	0%	⑤全然役だっていない	0%
8 その後の子育ての変化、その他、BPに参加したことによる変化	<p>・自分は、子どもに何もしなければいけないのでは、みんなはもっとちゃんと子育ても家事もカンベキにこなしているのでは、子どものかかわり方が足りないのでは、とふと思うことがあったが、BPに参加をしたことで、気持ちが楽になり、ゆとりをもって子どもに接することができるようになりました。ママ友もでき、とても良かったです。</p> <p>・親が笑顔でいることが、赤ちゃんにとって大事なことであったときつけた。</p> <p>・私も、育児が孤独だし、大変なことばかり…。と感じていたので参加しました。他の参加者が育児が楽しい！という人ばかりだったらむしろストレスになったかもしれません。“育児がつらいと思うことがある”という人を前提に募集をした方がいいかもしれません。幸いBPには同じく育児は大変！という人がいたので、よかったです。何より今でもBP仲間と定期的に会っています。これが一番の収穫！BP参加で育児が楽になるわけではありませんが、ママ友を得たのは、本当に良かったです。もっと開催をしてほしいです。後輩ママさんのためにも…。</p> <p>・BPで知り合いになったママ友さんと、その後も継続的に会い、情報交換を行っています。子どもが泣いたり、ぐずったりした時も、それを当たり前、そういう時期なのだ、とおもってイライラせず、やさしく接するように心がけるようになりました（自分のメンタルコントロールできるようになったというか、あえて意識して接するようにしています）</p> <p>・少しですが、ママ友が出来て、相談できる相手がいることで、気持ちが楽になりました。また、外出することを楽しむことができました。</p> <p>・毎回行くのは大変でしたが、皆とじっくり悩みを話し合える場はなかなかなかったので、とても良かったと思います。私はたまに抜けてみてもらえる（子どもを預けて少し自分の時間を持つ）ので、まだぐもれてありがたいと思うようになりました。</p>									

3. まとめ

BPプログラム参加による子育てへの影響を検討するために、実際にBPプログラムを実施し、参加者を対象として2回のアンケートを行った。参加をする理由は様々であるが、プログラムに参加をし、同じような月齢の子どもを持つ母親同士が子育てについて話しをすることで、お互いの子育てについて知り合える。そして子育ての方法は一つではないことを学び、子育てで大変な思いをしているのは自分だけでないことを感じるができる機会となった。また、BPプログラムが終了してからも、プログラムへ参加をしたことが日常の子育ての中で生かされ、子育てへの負担感、精神的ゆとりを生み出していることがわかった。さらに、同じ地域に住んでいる母親同士が知り合える場でもあり、結果として地域の中での子育て仲間づくりの機会にもなっている。育児の孤立感

は、育児者を精神的に追い詰めることにもなり、子ども虐待を起す要因となりうる。BPプログラムでは、育児の孤立感、負担感を軽減し、子どもとかわる際に心のゆとりが生まれる効果があることがわかった。要するに、産後早期からの子ども虐待予防に効果があると考えられるのである。日本各地で子育て・親育ち支援、子ども虐待予防の目的でさまざまな子育て支援プログラムが展開されている（もちろん、各自治体等で独自に考案したプログラムを展開している地域もある）。しかしその多くは、外国で考案されたプログラムであり、その国々の文化的・社会的背景を考慮して作成されているために日本の文化的・社会的背景に適しているとは言い切れない。一方、BPプログラムの場合、大阪レポート^{7),8)}、兵庫レポート^{9),10)}などに見られるような、日本の子育ての実情を考慮して作成されているため、プログラム内

容に違和感を覚えにくい。

虐待予防、子育て・親育ち支援を目的としてプログラムを実施する場合、実施したという事実だけで、虐待予防、子育て・親育ち支援になったと捉えるのはやや強引な考えであろう。参加をしたことが、その後の子育てに何らかの影響があったと感じて初めて、プログラム実施の効果があったあるいはなかったということができるのではないだろうか。最後に、今回、2回のプログラム実施を試みたが、出席回数が少なかったり、途中から参加をしなくなった方もいた。このような母子に対しても、主催者を中心に個々に応じてフォローを行い地域との関係づくりの橋渡しを行うことも忘れてはならない。

4. 今後の課題

今回の調査は、調査のスタート地点と捉えている。BPプログラムの効果を検討するにはさまざまな課題を残している。

BPプログラムは、主催者、参加者、ファシリテーターが揃って初めて成立するものである。

参加者についての課題は、本調査で報告したように、プログラム参加による子育てへの影響を検討することである。本調査では、アンケートの回答数が少なく参考程度の報告にとどまったが、内容としては意義あるもだと考えている。今後もプログラム実施を積み重ねることで、徐々にアンケートの回答数を増やし、数値に一層の信頼性を持たせていきたい。また、アンケートの集計結果に頼るばかりではなく、途中から参加をしなくなった母子や継続フォローが必要と思われる母子に対して誰がどのようにフォローを行うのかも忘れずに行っていきたい。

BPプログラムでは、ファシリテーターは黒子に徹すると言われるように、ファシリテーターがプログラムの主人公となることは望ましくない。「「支援する」側の支援のありようが「支援」そのものの効果に関わる」と、長谷¹⁴⁾が述べているように、ファシリテーターの存在・力量は、BPのように構造化されているプログラムであっても、プログラムそのものに大きく影響を及ぼす。参加

者が中心となったプログラム展開のためのファシリテーターの在り方についても今後検討を行う必要があると考えている。

最後に、主催者に関する課題である。主催者には、会場の確保、日程調整、参加者募集等様々な役割を担っている。BPプログラムの場合、対象が低月齢であるため参加者にBP開催を周知し、足を運んでもらうためには、会場、日程、募集どれにおいても配慮と工夫を要する。大切な役割を担う主催者に焦点を絞って検討し、より効果的な実施のための方法を導いていくこともBP実施の上では大切なことである。

引用・参考文献等

- 1) 平成15年版 厚生労働白書
- 2) 横浜市こども青年局「横浜市こども・子育て支援事業計画の策定に向けた利用ニーズ把握のための調査」平成25年12月
- 3) 厚生労働省ホームページ（児童虐待の定義と現状）
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/dl/about-01.pdf
- 4) 内閣府政策統括官（共生社会政策担当）「子ども・子育てビジョンに係る点検・評価のための指標調査」平成25年3月
- 5) Nobody's Perfect プログラムは、親が親として育つことをサポートするプログラムである。参加者同士、お互いの子育ての悩みなどを話し交流する中で、子育ての基礎的な知識を学んだり、自分への自信を取り戻していく。また、参加者同士が支え合える身近な仲間づくりの機会ともなっている。
- 6) 寶川雅子「児童虐待防止のための子育て支援プログラムについて」鎌倉女子大学紀要 第21号 2014年3月
- 7) 服部祥子、原田正文「乳幼児の心身の発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点」名古屋大学出版会 1991年
- 8) 原田正文「育児不安を超えて—思春期に花開く子育て」朱鷺書房 1993年
- 9) 原田正文「子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防」名古屋大学出版会 2006年

- 10) 原田正文「完璧思考が子どもをつぶす」 ちくま
書房 2008年
- 11) 長谷範子「子育て支援事業に関する一考察」 四
天王寺大学紀要 第46号 2008年9月
- 12) 一色真帆「育児は育自」文芸社 2013年5月
- 13) コミュニティ・カウンセリング・センター (CCC)
ホームページ [http://www.k5.dion.ne.jp/~c-c-c/
nobodys-program.html](http://www.k5.dion.ne.jp/~c-c-c/nobodys-program.html)
- 14) NPO 法人 こころの子育てインターねっと関西
「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”－
解説とすすめ方－ BP ファシリテーター・ガイド
(第2版)」 2012年
- 15) NPO 法人 こころの子育てインターねっと関西
「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”
(愛称：BP) 参加者アンケートによるプログラム評
価結果」 2012年6月
- 16) NPO 法人 こころの子育てインターねっと関西ホー
ムページ <http://www.kosodatekki.com/>

要旨

親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”
(愛称：BP プログラム) は、初めて赤ちゃんを
育てる母親と0歳児期の赤ちゃんが対象のプログ
ラムである。BP プログラムは、日本の子育て事
情を考慮に入れ、Nobody's Perfect の理念に基づ
いて開発されている。本報告では、BP プログラ
ムの概要を紹介するとともに、BP プログラムを
実施しプログラムの効果検討を行った。その結果、
BP プログラムの参加者は、子育て仲間を作ること
ができ、育児の孤立感が軽減し、育児に対する
自信が増し、気持ちにゆとりをもって赤ちゃん
と関われるようになった等、前向きな姿勢で子育て
に取り組めるようになったという結果を得た。

(平成26年9月24日 受稿)